

Uttarajjhāyā 研究 VI

—Sañjaya 王—

山 崎 守 一

本稿は Uttaraññhayaṇa-sutta 第18章の試訳であり、前稿（『中央学術研究所紀要』第12号，pp. 4-48）を承ける。試訳の底本として J. Charpentier の校訂本（The Uttarāññhayanāsūtra, Uppsala 1922）を用い、cty は Uttarāññhayaṇī śrīmān-Nemicandrācāryaviracitasukhabodhānāmyā vṛṭṭyā samalankṛtāni (Valad, 1937) を使用した。なお、略号はすべて「Uttarajjhāyā 研究 II」（『中央学術研究所紀要』第10号所載）の略号表に従う。

第十八章 「Sañjaya 王」

1. Kāmpilya の町に多数の軍隊と車乗を所有したサンジャヤ (Sañjaya) と名づく王がいた。彼は狩猟に出かけた。

2. 彼はいたるところ、大きな騎兵、象兵、車兵、歩兵よりなる〔四軍〕によって囲まれていた。

3. 彼は Kāmpilya の Kesara 園で馬に乗って鹿たちを駆りたて、その楽しみに執着した彼は、そこで畏れ、疲れ果てた鹿たちを殺害した。

4. その時、Kesara園に家を捨てた〔偉大な〕苦行者がいて、彼は聖典の暗誦に〔精神を〕集中し、法の学習に静慮していた。

5. 流入（漏）を減した彼は、Apphova で覆われたあずま屋で静慮していた。その王は彼（出家者）に近づいてきた鹿たちを殺した。

6. その時、馬に乗ったその王は、速やかにそこにやって来て、殺された鹿たちを見てから、そこにいる出家者を見た。

7. そこで王は心が乱れた。「不運な殺害者であり、楽しみに執着した私によって、この出家者は殺されそうになった」〔と彼は考えた。〕

8. 馬を解き放って、その王は出家者の足下に礼義正しく礼拝した。「尊者よ、ここで私を許して下さい」

9. しかし、この尊者である出家者は沈黙したまま深く禅定に入っており、王に返答しなかった。それで王は恐怖に襲われた。

10. 「私はサンジャヤです。尊者よ、私に答えて下さい。憤怒した出家者は〔怒りの〕火によって千万の人々を燃やしてしまうかもしれない」

11. 「王様、あなたに恐怖はありません。〔生きものに〕恐怖を与えない者となって下さい。無常な生物の世界において、何故あなたは殺害に執着するのですか。」

12. あなたはすべてを放棄して、あなたの意志に反して〔他の生存に〕行かねばならないのに、無常な生物の世界において、何故あなたは王権に執着するのですか。」

13. あなたが惑わされる生命や美は電光の閃めきのように不安定であります。王様、あなたは次の世での利益を理解しておりません。

14. 妻たち、息子たち、友人たち、また親族たちも同様に、生存せる人に依存して生きる。しかし彼らは〔彼の〕死に追従しません。

15. 息子たちは大いに悲しみ、父の死骸を運び出します。父たちも又、息子たちを、親族たちも〔親族たちを〕そのようにするでしょう。王様、あなたは苦行すべきです。

16. 王様、それから、喜び、満足し、着飾った他の人たちは、彼（父）によって獲得された財産を楽しみ、彼がよく保護した妻たちと戯れます。

17. 彼が作した業が、楽または苦〔のいずれを生じるもの〕であろうとも、その業に結びついて彼は他の生存に至るでしょう」

18. 出家者の前でこの法を聞いて、その王は甚しく解脱に対する願望と現世への嫌悪に到達した。

19. サンジャヤは出家者であるカルダバリー (Gardabhāli) 尊者の面前で、王権を放棄して、勝者の教え〔を受けて家から〕出離した。

20. 王国を放棄して出家者となった一人のクシャトリア (Kṣatriya) は言った。「あなたの姿が静穏に見えるように、あなたの心もそのようである。

21. あなたの名前は何ですか。種姓 (Gotra) は何ですか。何故あなたはバラモンなのですか。あなたはどのように覚者たちを尊敬するのですか。あなたはどのように訓練された人と言われるのですか」

22. 「私の名前はサンジャヤである。ゴータマ (Gotama) の種姓である。私の師匠はカルダバリーで、明知と〔善〕行とを具足して

いる。

23. 作用〔論〕、無作用〔論〕、持律〔論〕、無知〔論〕、これら4つの立場(学説)によって限られた知識を持つ人は何を話すのか。

24. 悟り、賢明で、解脱した、明知と善行を具足した、真理を語り、真理に精進する人はこのように明らかにした。

25. 悪行を作す人たちは恐しい地獄に落ちる。聖なる法を實踐して、彼らは天国の道を行く。

26. この妄想的な話は偽りの言葉であり、無意味である。私は自制しつつ住し、行く。

27. 私はこれらすべての偽りの見解(邪見)は賤劣であると知る。私は他の世界の存在を知るので、正しく自分自身を知る。

28. 私は Mahāprāṇa [天国]において威厳があり、あたかも100歳であるかのようであった。天国の Pāli-mahāpāli は100歳のである。

29. 梵天界 (Brahmaloka) から降りて(下生して)、私は人間として再び生まれた。私は自分自身の寿命を知ると同様に、他人の寿命をも知る。

30. 自制者は種々の〔異教説に対する〕欲望と〔自分自身の〕欲求とを放棄すべきである。それらはどこにおいても無益である。このように知って人は〔出家者として〕生活すべきである。

31. 私は〔吉凶等の〕問い合せや他の人々の呪文を避ける。ああ！ 昼も夜も私は〔法に〕努力した。このように知って人は苦行を實踐すべきである。

32. 清浄な心であなたがちょうど今、私に尋ねたそのことを覚者は明らかにした。そのような教えは勝者の教えである。

33. 賢人は作用〔論〕を正しいと考え、無作用〔論〕を避けるべきである。〔正しい〕信仰（正見）を所有しつつ、〔正しい〕信仰によって行ない難き法を実践せよ。

34. 真理と法とによって飾られたこの神聖な言葉を聞いて、Bharata は Bharatavarṣa と愛楽を放棄して出家した。

35. Sagara 王も又、海に囲まれた Bharatavarṣa と完全な王権とを放棄して、慈悲によって解脱を得た。

36. Bharatavarṣa を放棄して、大威力があり、大変に有名で Maghavan と名づく転輪王は出家者となった。

37. 大威力のある転輪王、Sanatkumāra 王は、王位を子供に譲り、この王も又、苦行を實踐した。

38. Bharatavarṣa を放棄して、世界に平和をもたらず大威力ある転輪王、Śānti は無上の境界（解脱）を得た。

39. Aikṣavāka の王たちの牡牛（主）であり、一般によく知られ、尊嚴ある Kunthu と名づく王は無上の境界を得た。

40. 海に囲まれた Bharatavarṣa を放棄して、Ara 王は汚れなきものとなり、無上の境界を得た。

41. Bhāratavarṣa を放棄し、軍隊と車乗を放棄し、最高の享樂をも放棄して、Mahāpadma は苦行を實踐した。

42. 地上を一傘蓋の下に服従させて、〔敵の〕自負をへし折った Hariṣeṇa 王は無上の境界を得た。

43. 何千もの王に伴われた Jaya と名づく〔王〕は、出家して自制を實踐した。彼は勝者によって説かれた〔自制を實踐して、〕無上の境界を得た。

44. 喜びに満ちた Daśārṇa 王国を放棄して、Daśārṇabhadrā は牟尼として行動した。彼は Śakra によって駆り立てられ、本人自ら出家した。

45. Nami は Śakra によって駆りたてられ、本人自ら自分自身を謙遜した。Videha の王は家を放棄して、沙門〔道〕に身を捧げた。

46. Karakaṇḍu は Kaliṅga 国における、Dvimukha は Pañcāla における、Nami は Videha における、Naggati は Gāndhāra における王であった。

47. 王たちのこれら牡牛（主）たちは、勝者の教え〔を受けて家から〕出離した。息子たちを王位につかせて、彼らは沙門〔道〕に身を捧げた。

48. Sauvīra 王たちの牡牛（主）である Udāyana は、〔王国を〕放棄して、牟尼として行動した。彼は出家者となり、無上の境界を得た。

49. このように Kāśi の王は、より優れた真理に努力しつつ、感覚的な享樂を放棄して、大森林のようであった業を打ち砕いた。

50. このように不滅の名声があり、高名な Vijaya 王は、福德によって繁榮した王国を放棄して出家した。

51. このように Mahābala 王仙は心を取り乱すことなく、厳しい苦行を實踐し、最上の榮光を得て、〔入滅した。〕

52. これらの賢人たちは殊勝を得て、強く努力するものとなったのに、何故賢人は悪い理由の故に、地上で狂った人のように行動するのか。

53. 終わりのない再生に耐えることのできる真実の言葉は、私によって話された。ある人たちは〔輪廻を〕渡り終え、ある人たちは

渡ろうとしており、またある人たちは将来渡るであろう。

54. 賢人は悪い理由の故にどこに自分自身を住居させるべきか。すべての欲望から解放され、罪のなくなった彼は完成者になる」

註記

1. kampilla, Kāmpilya は南 Pañcāla の首都であった。Dey (*the Geographical Dictionary of Ancient and Mediaeval India*, New Delhi 1971, 3rd ed., p. 88) によれば, Farrakhabad 地方における Fathgaḍ の北東28マイルに位置する。

saṃjaa, 註釈者たちによって Saṃyata = Prasiddha と解されてきた。Jacobi (SBE, XLV, p. 80, n. 4) は saṃjaa を saṃyata と Skt に戻す註釈者の見解を王の名前のように思えないと疑問視し、この王の名前の Skt 形は Skt 文学にしばしばみられる Sañjaya あるいは Sñ-jaya であることを示唆している。ここでは Sañjaya を採用する。cf. *Prakrit Proper Names* (ed. by Dalsukh Malvani, Part II), p. 738, C. J. Shah, *Jainism in North India* (Studies in Indian History of the Indian Historical Research Institute, St Xavier's College, Bombay, No. 6), p. 82.

Isibhāsiyāim 第39章は「Sañjaya 聖仙の教えの章」であり、ここに登場する Sañjaya は仏教聖典に伝えられた異教徒の懐疑論者 Sañjaya を予想させるが、この章にあらわれる Sañjaya とは別人であろう。

miḡava- < mḡavya-. Devendra は miḡava-vaṃ と読み、pāṭhāntareṇa mḡavadhaṃ と説明するが、miḡavaḥaṃ は metre を損うという理由で Charpentier は否定する。

2. hayāṅī, cty は Skt hayānikena を与える。AMgD (s. v. haya) はこれを採用する。これに反して、J. J. Meyer (*Hindu Tales*, London 1909, p. 82, n. 1) は註釈者の示す hayānika は不可能であると考え、hayāṅī = Skt *hayāni “a collection of horses” とみている。Charpentier は *hayāni は Skt に存在しないが、Indrāṅī,

Brahmāṅī がみられることから、Meyer の見解を支持する。Mūlasarvastivāda-pravrajya-vastu (*Gilgit Manuscripts*, vol. 3, part 4, ed. by N. Dutt, p. 4) に aṅgarājasya balakāyo mahān saṃvṛtto hastikāyo 'śvakāyo rathakāyāḥ pattikāya iti caturaṅga-samanvitas が あることから Meyer の見解 *hayāni > hayāni “a collection of horses” は正しいように思える。この視点に立つなら、gayāṅī < Skt *gajāṅī, rahāṅī < *rathāṅī, pāyattāṅī < *pādātāṅī ということになる。mahayā はもちろんここでは女性形として使用される。

3. pāda a は9音節ある。cadence = - ~ ~ ~ ~ ~ として。cf. A. K. Warder, *Pali Metre*, London 1967, § 242.

chuhittā, J: chivettā, Sh, Sv: chubhittā の異読がある。cty のテキストは chubhittā と読み、kṣiptvā prerayitvā と註解する。Sh の註釈文も同様である。しかしながら、Charpentier が示しているように kṣubh-> chu- に解する。cf. R. L. Turner, CDIAL 3721 *kṣubhati, PED s. v. saṅkhubhati.

hayagau, cty: haya-gao, hayagataḥ aśv' ārūḍhaḥ.

kampill' ujjāṇa-kesare, cty によって kampill' ujjāṇa-kesare tti kāmpilyasya sambandhini keśara-nāmy udyāne と説明される。Charpentier は °ujjāṇa kesare (ミスプリント?) と読んでいるが、複合語として読むべきである。このことは他の版本からも確認できる。

pāda cd, cty: bhitān trastān śrāntān itas tataḥ prerāṇena khinnān mitān pramitān tatra teṣu mḡeṣu madhye vahei tti hanti rasa-mūrchita iti sūtra-dvy-arthaḥ この註釈文によれば、「王はこれらの鹿たちの中で (tatha) 怖がり、疲れた限られたものを (mie) 殺した」という意味が含まれる。

4. pāda a は9音節ある。kesare と読むなら、8音節になるが、~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ は不規則である。この解決は aha (~) あるいは 'ha と読むことにあるように思える。pāda の最初の頭母音の省略は正常とはいえないが、BHSG (§ 4.8) は Āryā 韻律の初めの aṣiti に対する 'ṣiti を引

用しているし、K. R. Norman 先生 (EV I, p. 259) は Theragāthā におけるこの例をあげ、さらに Udānavarga からいくつかの例を提示している。

tavodhaṇa <Skt tapodhana “great ascetic”.

5. pāda a, cty: apphova-maṇḍavammī tti apphova iti vṛkṣ' ādy-ākīrṇaḥ sa cāsau maṇḍapaś ca nāga-vally-ādi-sambandhī apphovamaṇḍapas tasmin.

Jacobi (p. 81, n. 2) によれば、apphova の Skt 対応語は āsphota ということになるが、Charpentier は t>v の例がないという理由でこれを否定する。

PSM (s. v. apphova) は Deśi 語とみている。AMgD (s. v. apphova) は apphova-maṇḍava <*apphova-maṇḍapa, “a bower densely covered with creepers” を与えている。

この pāda は 7 音節しかない。そこで失なわれた音節を仮定することによって pāda を正常化することができる。この場合、(t)u あるいは ca を補うことが可能なように思えるが、どの版本にも見出すことができない。E. V. Arnold (*Vedic Metre*, Cambridge 1905, § 20) は Rgveda において多くの dimeter verse (二歩格詩) が 7 音節のみを含んでいることを指摘している。そして正常な dimeter verse から最後の音節が失なわれているものを catalectic dimeter verse, それ以外の場合を heptasyllabic と呼んでいる。

khaviy' āsava, **S, Sv** と Charpentier は kkhaviyāsava の読みをとるも、**Sh, J** は jhaviyāsava をとる。また、cty は jhaviya tti kṣapitā を与えている。S. M. Katre (“Sanskrit Kṣ in Pāli”, JBORS vol. 23, p. 93) は Pāli における abhijjhita- <abhikṣita-, pajjhāyati <prakṣāyati, nijjhatta- <*nikṣapta- を提示している。MIA においては cch <kṣ と同様に、jjh <kṣ が可能である。cf. jhijjai (Utt. 20. 49) <kṣiyate “he perishes” (Pischel § 326).

āsava は Pāli においても同形であり、仏典では khīṇāsava (BHS kṣīṇāśrava) として見いだされる。cf. Dh. 89, 420; Sn. 82, 471, 539, 644, etc. 語源的には ā-√rsu “to flow in” から由来して生じたことは明らかである。Jacobi

は “sinful inclinations” と訳すが、Utt. 19. 93 では “influx of karman” と訳している。さらに彼は āsava を “the flowing in of the karman upon the soul” (SBE 45, p. 55, n. 1) として、また “that by means of which karman takes effect upon the soul (SBE 22, p. 37, n. 1) として説明する。ジャイナ教では karman が jīva (靈魂) へ流れ入ることを āsava と称した。āsava の起源とその展開に関する研究がある。cf. 榎本文雄「āsava (漏) の成立について——主にジャイナ古層經典における——」『仏教学研究』第22巻1号, pp. 17-42. pāda c, cty: tasya anagārasya āgatān mṛgān pārśvaṃ samīpam.

6. pāda d は 9 音節ある。ana-(◡), あるいは母音の省略、すなわち ṇagāraṃ と読むことによって metre を正常化することができる。

7. pāda a は 9 音節ある。aha を 'ha と読むか、あるいは ◡ とみなせば、cadence が ◡ - - - (pathyā) となり、metre は正常化する。

ghannu, **S**: ghattunā, **Sh, Sv**: ghaṃtunā (Skt ghātukena) の読みがある。cty は ghattuṇa tti ghātukena hanana-sīlena と説明する。また AMgD (s. v. ghaṃtu), PSM (s. v. ghattu) は Skt ghātuka を与えている。ghattu- あるいは ghaṃtu- のいずれの読みをとるにせよ、Skt 対応語を ghātuka と認めるなら、-ka の省略をどのように説明できるかが問題となろう。ghātuka->ghattu- / ghaṃtu- は不可能であるように思える。そこで Skt 対応語として *ghātu を認めるか、ghāta を認めざるを得ない。ただし後者の場合、inst. kammaṇā, dhammaṇā が存在するように ghattunā / ghaṃtunā を仮定するわけである。しかしながら、Charpentier と **J** は ghannuṇā と読む。そして Charpentier は hatnu->ghannu- とみている。この解釈は極めて自然であるように思える。

8. pāda c は 9 音節ある。この解決は vīnaeṇa vandae pāe ◡ - ◡ - ◡ - ◡ - ◡ - ◡ - ◡ - ◡ - ◡ にある。

pāda d, cty: bhagavan! atra mṛga-vadhe mama 'parādham itī śeṣaḥ kṣamasva. atra とは etasmin mṛga-vadhe (**Sh**) ということになる。

9. pāda abc は9音節ある。aの解決は第7音節 bhaga- = ∪ に、bは第1音節 ana- = ∪, あるいは 'nagāre に、cはna paḍi- = ∪ にあのように思える。
tao, cty: tataḥ kāraṇād.
10. pāda c は9音節ある。anagāre = ∪ - - .
11. pāda b は9音節ある。abhaya- = ∪ によって metre は正常化される。
12. 第1半詩節は yadā sarvaṃ kośāntaḥpur' ādi parityajya gantavyaṃ bhavāntaram iti śeṣaḥ avaśasya asva-tantrasya te tava と説明される。
13. vijju-sampāya-caṃcalam, cty: vidyut-sampātaḥ vidyuc-calaṇaṃ tad-vat cañcalam.
peccatthaṃ, cty: pretyārthaṃ praloka-prayojanaṃ.
14. pāda c, cty: jivantam anujīvanti tad upārjita-vitt' ādy-upabhogata upajīvanti.
ya, この ca は接続詞というよりむしろ、離接接続詞であろう。cf. J. S. Speyer, *Sanskrit Syntax*, Leyden 1886, p. 341. cty は ya = kim punaḥ を与え、この事実を支持している。
15. niharanti, cty: niharaṃti tti nissārayanti. Cherpentier は *Hindu Tales* (p. 141, n. 2) において示された Meyer の見解 ni-har- <nir-har- を疑問視し、ni-har- <niḥ-sar- と考えているように思える。確かに niḥ-sar- > *nissara- > *nisara- > nihara (s > h, Pischel § 264) は可能であろうが、nir-rajas (v. 54) > *nirrajas > nīrao と同様に、nir-har- > *nihhara- > nihhara が自然であろう。nir-har- も niḥ-sar- も同じ意味をもつて誤った語源が導かれたのであろう。Turner (CDIAL 7404) は nirharati > niharai を与えているし、Pāli には niharati “to take out” が存在する。
pāda b は9音節ある。opening は ∪ - ∪ - ∪ あるいは ∪ - ∪ - ∪ として。
bandhū, cty: baṃdhu tti bandhavaś ca bandhūn iti śeṣaḥ.
16. cty: tataḥ niḥsāraṇād anantaraṃ tena pitrādīnā arjite dravye sati dāreṣu ca parirakṣiteṣu kriḍanti tenaiva vittena dārais ca ...
dāre と parirakkhie は、Devendra によってどちらも loc. pl. に解され、さらに原形は inst. pl. であったことを予想せしめる。S. Sen (*Historical Syntax of Middle Indo-Aryan*, Calcutta 1953, § 37) によれば、MIA において “to play with or at” 等の意味を持つ動詞は inst. を支配し、この種の動詞の中に kilai (Pāli kiḷati) が含まれている。Skt においては √kriḍ は inst. を伴うか、あるいは saha, samam, sārddham を伴うのであるが (cf. MW s. v. √kriḍ). Pāli においては inst. の他に acc. を伴うこともあり (cf. Oskar von Hinüber, *Studien zur Kasussyntax des Pāli, Besonders des Vinaya-piṭaka*, München 1968, § 147), さらに loc. をも伴うことがある (cf. D. Andersen, *Pāli Glossary*, Copenhagen 1907, s. v. kiḷati).
Geiger (§ 79) は Skt -ais が Pāli -e に相当する例を提示している。AMg においても -ais > -e は適用される。例えば, dukkhe (Utt. 23. 80) は Devendra によって Skt duḥkhaiḥ と解釈されており、明らかにこの例である。そこで Jacobi 訳 “They will dally with the wives he had so well guarded” や kilae saha itthiṃ (Utt. 19. 3b) 等からも、ここは inst. pl. が最適であり、dārais > dāre, parirakṣitais > parirakkhie であるように思える。
ついでながら、東部方言では loc. pl. -ehi = -esu が認められる。cf. H. Luders, *Beobachtungen über die Sprache des buddhistischen Urkanons*, Berlin 1954, §§ 220-25). また AMg における inst. / loc. に言及した論文がある。cf. A. M. Ghatage, “Instrumental and Locative in Ardha-Māgadhi”, *IHQ* 13, pp. 52-58.
17. pāda b は
suhaṃ vā jai vā dukkhaṃ (Sūy. 1. 1. 2. 2c)
sukhaṃ vā yadi vā duḥkhaṃ (Sn. 738a)
sukhaṃ vā yadi vā duḥkhaṃ (MBh. 4. 16. 14a)
と parallel な関係にある。しかし cty は suhaṃ = śubhaṃ, duhaṃ = aśubhaṃ を与えている。
18. pāda c は9音節ある。この解決として opening は ∪ - - - と解する。
Meyer (*op. cit.*, p. 82, n. 1) は mahayā を

“very much, exceedingly”の意味をもつ副詞として説明する。

cty によれば, samvegaḥ=mokṣā 'bhilāṣaḥ, nirvedaḥ=samsārōdvignatā である。

19. pāda c は9音節ある。gaddabhāli-bhagavao と読めなくもないが、- - - | - - - | は不規則である。K. R. Norman 先生は Pāli において固有名詞が含まれる時、その pāda は hyper-metric と認めた方がよいことを指摘している (EV I, Intro. § 37)。このことが Jaina Pkt においても当てはめられることを躊躇する理由は何もないように思える。

20. 伝統的に ciccā <Skt tyaktvā とみなされる。しかし、(ciccā / ceccā (a>i, before -cc-) <*caccā <Skt *tyaktyā =Skt tyaktvā, -tvā> -ccā ではなく、-ccā <-tyā については Utt. 13. 24 の註記 (『文化』46, p. 246) をみよ。

cty からこのクシャトリアの前生は, Vaimānika 神であり, 下生してクシャトリアの家系に生まれつつも, 出家者となったことが知られる。

21. pāda a は6音節しかない。しかし cty は tathā kiṃ nāmaḥ? kiṃ gotraḥ とあり, 本来, tahā も読まれていたことが推定される。

māhaṇa, cty は māhanaḥ=pravrajitaḥ を与える。māhaṇa の Skt 形は brāhmaṇa である。この発展過程は brāhmaṇa>bambhaṇa>bābhaṇa>bāhaṇa>māhaṇa となる。-b->-m- の例として, kabandha>kamandha (Pischel § 250), paribandh->palimanth- (K. R. Norman, “Middle Indo-Aryan Studies V”, JOI 1965, p. 116) がある。初期ジャイナ教や初期仏教においてこのような出家修行者をバラモンと呼んでいたことが知られる。

pāda c は9音節ある。この解決は第3音節にあるように思える。すなわち、- - - | - - - | である (cf. F. Edgerton, “Meter, Phonology and Orthography in Buddhist Hybrid Sanskrit” JAOS vol. 66, § 43)。

paḍiyarasi は praticarasi=sevase と解される。ここで seva- の意味をもつ動詞は praticara- ではなくて pari-car- である (cf. MW s. v.)。このことは PED (s. v. paricarati, paricareti) によっても確かめることができる。M.

B. Emeneau (“Confusion in Prakrit between the Sanskrit Prepositions prati and pari”, JAOS vol. 51, pp. 33-39) は Skt pari が Pkt paḍi にとって代わられた多くの事例をあげ、同意義である理由を示している。こゝも paḍi-/pari- と考えられる。

buddhe, cty: buddhān ācāry' ādin.

pāda d は9音節あり, 1音節余分となるが, 9音節の Śloka として。cf. Utt. 17. 3 の註記。

22. pāda c は9音節あり, 1音節余分である。この解決は āyariyā を āyar¹yā と読むことにある。r の後の i は svarabhakti vowel である。多くの単語の中で歴史的根拠上, 挿入であると思われ, 一かたまりの子音を解くために展開される母音は, 韻律のために無視されねばならない。多くの場合, 詩頌が作成された時代には, 未だ挿入母音が発展していなかったことによると思われる。K. R. Norman, EV I, § 51; EV II, § 75 をみよ。

23. ジャイナ教は当時存在した異端説を四種に大別した。この異端説は 363 種を数え, その内訳は作用論に 180 種, 無作用論に 84 種, 無知論に 67 種, 持律論に 32 種ということになる。詳しくは金倉圓照博士『印度古代精神史』pp. 166-73, 中村元博士『原始仏教の成立』19 ff. をみよ。

pāda a は10音節あるが, k¹riyaṃ ak¹riyaṃ と読めば, metre は正常化される。k と r の中間にある i は svarabhakti vowel である。

pāda c は9音節ある。cau-ṭhāṇehiṃ と読めば, cadence は pathyā となり, この pāda は正常化される。

24. pāukare, cty: pāukare tti prādurakāṣit prakaṣitavān. この opt. は aorist の意味で使用される。cf. Pischel § 466. BHS でも同様な現象がみられる。cf. BHSG §§ 32. 85-105.

pāda c=Sn. 163c, 164c: vijjā-caraṇa-sampannaṃ.

26. Śāntisūri によれば, この詩頌はすべての写本に存在しない。彼は v. 23 と v. 27 を直接結び付けているので, v. 26 が vv. 24-25 と同様であると考えられることは可能である。しかしこれは全く確かではない (Charpentier)。

27. pāda b=Utt. 34. 25d, Sūy. 1. 1. 2, 10b.

pāda c, cty: vidyamāne sati paraloke anyasmin janmani. loc. absolute に解する。

28. pāda b は10音節, d は9音節ある。この2つの pāda において varisa- は var¹sa- と読むことができ, d は正常化するが, b はさらに jui-maṃ = ㄨ- でなければならぬ。しかしこれでも第6音節が短母音で変則となるため -uva-me を -ovame と読み改めるべきであろう。これは cty によっても支持される。

30. rui, cty: kriyāvādy-ādi-mata-viṣayam abhilāṣam.

chanda, cty: chandaś ca svam ativikalpitam abhiprāyam.

iya は ii, iti の異読がある。iya = ㄨ- と解すべきであろう。

pāda d を Devendra は iti ity evaṃ rūpāṃ vidyāṃ samyag jñān' ātmikāṃ anv iti lakṣikṛtya sañcareṣ samyak saṃyamādhvani yāyā と説明する。Jacobi の訳 “One should live up to this wisdom” はこの註釈に基づいている。しかし Jacobi は註記の中で vijjā は vidvān であり, v. 31 における vijjā と同じであると考えた。すなわち, vijjāṃ は Devendra が考えたように aṇusaṃcare の目的語ではない。それ故にここでの m はしばしばみられる sandhi consonant (cf. Pischel § 353) である。Jacobi の見解は Charpentier によって採用された。

31. paṣiṇāṇaṃ は Devendra によって paṣiṇāṇaṃ ti praśnebhyaḥ śubhāsūbha-sūcakebhyaḥ aṅgu-ṣṭha-praśn' ādibhyaḥ と説明される。また paṣiṇāṇaṃ と読むことによって metre は正常化される。i は svarabhakti vowel である。cf. v. 22 の註記。

pāda c は9音節ある。aho は vismaye と註解される。'ho と読むことによって metre は正常化する。また utṭhie は utthitaḥ dharmaṃ pratyudyataḥ と註釈される。

vijjā は vidvān = jānan に解される。この語 vijjā は Utt. 9. 49:

puḍhavi salī javā ceva
hiraṇṇaṃ pasubhissaha /
paḍipuṇṇaṃ nālam egassa
ii vijjā tavaṃ care //

にもみられ, cty によって sūtratvād viditvā と註釈される。

K. R. Norman 先生 (“Some Absolutive Forms in Ardha-Māgadhī”, IJ vol. II, pp. 312-3) は vijjā の三例 (vv. 30, 31, 9. 49) は absolutive 形であることを立証している。すなわち, Utt. 9. 49 に対する cty が vijjā を absolutive と見做している事実はこの問題を解決する糸口になる。vijjā は *vidyā から由来しているものであり, 単純動詞 + -ya (長音化した -yā) という Pāṇini の規則に合わない形であることを指摘している。

pāda b は第5音節が長音であり変則である。しかし, Sv は paramantehi と読んでおり, これは metre を正常化する。

32. buddha <ブツダ> というのは当時インド一般に聖賢, あるいは修行を完成した人の呼称であったにすぎない(中村元博士『原始仏教の思想上』p. 325)。vv. 21, 24 における buddha も同様である。

tāim, cty は sūtratvāt tat と註解する。

33. kiriyaṃ を k¹riyaṃ, akiriyaṃ を ak¹riyaṃ と読むことによって metre は正常化される。cf. v. 22 の註記。

Devendra によれば diṭṭhi は buddhi の意味で使用される。

34. vv. 34-51 に登場する王については Charpentier と Jacobi の有益な註記がある。

soccā = śrutvā, ceccā = tyaktvā と cty は註解する。しかし soccā <*śrutvā, ceccā <*tya-kyā である。-ccā <-tyā については v. 20 の註記をみよ。

pāda c は9音節あり, 1音節余分である。この解決として bharao = ㄨ-。あるいは [vi]。

Bharaha, Pischel (§ 266) は Pkt において sandhi -h- が存在したことを否定し, -h- は子音の帯気音から起こると考えた。すなわち, ta > tha > ha, da > dha > ha, ka > kha > ha, ga > gha > ha, etc. である。したがって Bharata > Bharatha > Bharaha を導いている (Pischel § 207)。しかしながら, S. N. Ghosal (“The Euphonic-glide H in Prakrit”, JOI Baroda IX, 1960, pp. 256-59) は音便上のつなぎ音 (euphonic-

glide) -h- の存在を認めた多くの学者に言及し、かつ多数の例を引用し、つなぎ音 -h- は母音接続を回避するための Pkt における現象であることを論証している。彼によれば、Bharata > Bharaa > Bharaha である。cf. *vasahi* (Utt. 14. 48) <vasai <vasati.

Bharata については Charpentier と Jacobi の註記がある。D. Malvania (*op. cit.* 521 f.) も参照。

35. *bharaha-* = ㄣㄣ, *issar¹yaṃ* によって metre を正常化することができる。

cty は *hiccā* = *hitvā*, しかし *hiccā* < **hityā* である。

36. *mahaḍḍhio* / *mahiḍḍhio*, Pāli は *mahiddhika* = “having great *iddhi* (=supernormal power)” (K. R. Noman, *EV I*, p. 194) である。derivation は *mahā + ḍḍhika* > *mahā + iḍḍhika* > *mah' iḍḍhika* となる。

pāda d は 9 音節ある。 *maghavaṃ* = ㄣㄣ - と読むことによって解決することができるが、hyper-metric と認めた方が良いように思える。固有名詞が含まれるときに起こりうる現象である。cf. v. 19.

37. *pāda a* は 9 音節ある。36 d と同様、hyper-metric である。

40. *pāda b* に *bharahaṃ vāsaṃ narisaro, bharahavāsaṃ narasaro* の異読がある。 *bharahaṃ* = ㄣㄣ - とし。

41. *pāda d* は 9 音節ある。 -*paume* = ㄣㄣ - とし。

42. cty: *māṇa-nisūraṇo tti dṛptā 'rāty-ahaṅkāra-dalaṇo*.

43. *pāda a b* は 9 音節ある。 *pāda* の最初の頭母音の省略は避けるべきであるが、'nnio と読む。 *b* は *supariccāi* = ㄣㄣ - - - とし。

cty: *supariccāi tti suṣṭhu śobhana-prakāreṇa rājy' ādi tyajaty evaṃ śiḷaḥ suparityāgī damaṃ care tti acārit jayanāmā ekādaśa-cakrī jin' ākhyātaṃ damam iti yojyam, caritvā ca prāpto gatim anuttarām.*

44. *pāda d* = Utt. 9. 61 b: *sakkhaṃ sakkeṇa coiu.*

45. この詩頌は Utt. 9. 61 (ただし *vaidehī* に対

し *ca vedehī*) に同じ。 *pāda d* = v. 47d.

pāda c は 10 音節ある。 *jahittā rajjaṃ vaidehī* (**Sh**) の異読がある。また **Sv** は *caiūṇa geḥaṃ vaidehī* と読みつつも *Skt hitvā rājyaṃ ca vaidehī* を与える。このことは原形が *jahittā rajjaṃ* であったことを窺わせる。そこで *jahittā rajja[m] vaidehī* の読みをとり、 *vaidehī* = ㄣㄣ - - と考える。

46. *Domuha* 王の物語が伝えられており、王の名の由来を伝える部分を抜き出すと以下のようになる。 *ārovio maṅgala-tūra-saddeṇa appaṇo uttim' aṅge maḍḍo. tap-pabhāveṇa do-vayaṇo so rāyā jāo. loeṇa tassa Domuho-tti nāmaṃ kayaṃ.* (Jacobi, *Ausg. Erz.*, p. 39, l. 12-14) 「魔法の王冠によって王が二つの顔になったので、*Domuha* と名づけられた」というのは一種の通俗の語源 (Folk Etymology) 解釈である。しかし実際の語源は *durmukha* “bad faced” > *dummuha* > **dommuha* > *domuha* “two faced” である。cf. Meyer, *op. cit.*, p. 140, n. 2.

Karakaṇḍu も Folk Etymology の一つである。 *ahaṃ tubbhaṃ rāyā, mama karaṃ deha! so lukkha-kacchūe gahio. tāṇi bhaṇai; mamaṃ kaṇḍūyaha! tāhe se Karakaṇḍu-tti nāmaṃ kayaṃ.* (Jacobi, *op. cit.*, p. 36, l. 19-21) *Karakaṇḍu* という言葉には「税金が欲しくてむずむずする」という意味が含まれている。“*Taxes!*” と “*Scratch!*” という 2 つの言葉を少年時代の *Karakaṇḍu* 王は彼の愛称に結びつけたのである。cf. Meyer, *op. cit.*, p. 128, n. 1.

Naggai も通俗語源であり (Meyer, *op. cit.*, p. 186, n. 2), *Nagagati* 「山に行く人」の第 2 母音が落ちて *Naggai* になった。 *Naggai* 王の物語から名前の由来を示す一節を引用すれば、次のようになる。 *evaṃ vaccai kālo. rāyā pancama-diṇassa tammi nage vaccai. ciṭṭhai Kaṇayamālāe samaṃ kaivi diṇe. logo ya jaṃpai: nage aii rāyā. tao kāleṇa jamhā nage aii, tamhā Naggai esa-tti paitṭhiyaṃ nāmaṃ loeṇa rāiṇo.* (Jacobi, *op. cit.*, p. 54, l. 26-29)

48. Charpentier は Aug. Erz. に v. l. uddāyaṇa があるように、この王の名前は Uddāyaṇa と表記されるべきことを主張する。Sh も uddāyaṇa と読んでいる。

cty: tyaktvā rājyam iti śeṣaḥ.

49. pāda a は 7 音節しかない。S, Sh, Sv は tah-eva kās^ṛ-rāyā vi と読む。pāda d は pahaṇe = ㄨ - とみる。

pāda b は śreyasi praśasye satye saṃyame parākramaḥ sāmārthyaṃ yasyāsau śreyāḥ-satya-parākramaḥ, pāda d は pahaṇe tti prahatavān, karma mahāvanam iva 'tigahana-tayā karma-mahāvanam と説明される。

50. cty のテキストは aṇaṭṭhākittipavvaē とあるが、註釈文では aṇaṭṭhākitti tti ānaṣṭā samastakalaṅka-vikalatayā sāmastyena 'pagatā akirttiḥ aślāghā yasya sa ānaṣṭākirttiḥ である。Charpentier が指摘しているように、確かにこの註釈文は混乱している。

今、Jacobi が示している v. l. aṇaṭṭhākitti を採用すれば、この Skt 形は ājñā+artha+ākṛti となる。しかし、ākṛti>ākiti が認められても、ākṛti>ākitti は不可能である。

また、Charpentier が註記で正しいと推定した読み anaṭṭa- (この読みは PSM にもあり、Skt anārta が与えられる) を採用すれば、anārta-kirti となり、aṇaṭṭhākitti と転訛するはずであり、aṇaṭṭhākitti とはなりえない。すなわち、何故 -ā- なのかが問題となるのである。

さらに、AMgD (s. v. aṇaṭṭha) にあるように、これは Charpentier の読みであるが、anaṣṭa-kirti と考えるなら、a-naṣṭa-kirti>aṇaṭṭha-kitti となるべきであり、aṇaṭṭhākitti とはなりえない。やはりここでも何故 -ā- なのかが問題となる。

しかしながら、a-naṣṭa-kirti は王の形容であり、もう一つの王の形容である mahā-jaso と同じ意味内容であるので、文脈にもよく適合するように思える。それ故、aṇaṭṭhākitti の -ā- は m. c. であるように思える。古典文学詩において Śloka 詩の偶数 pāda の opening で ㄨ - は避けられるべきであるから、長音化したと解することができる。

payahittu = prahāya と説明される。absolute 語尾 -itvā>-ittā, infinitive = absolute (cf. Pischel § 576) -itum>-itum. absolute の意味をもつ infinitive 語尾 -ittu(m) は、恐らく -ittā と -itum の異文融合から生じた。BHS においても infinitive が absolute の意味で使用されることがある。cf. BHS (§ 35. 54).

51. pāda d に ādāya śiraḥśriyaṃ sarvōttamām lakṣmīm parinirvṛtaḥ iti śeṣaḥ という註釈文があるので、これに従って訳す。

52. aheūhim, cty: ahetubhiḥ kriyāvādy-ādi-parikalpita-kuhetubhiḥ.

pāda c, cty: ete anantarōditā bharat' ādāyaḥ viśeṣaṃ viśiṣṭatām gamyamānatvād mithyā-darśanebhyo jina-śāsanasya ādāya grhītā.

53. cty は atyantam = atīśayena, nidāna-kṣamā = karma-mala-śodhana-samarthā と説明する。第 2 半詩節は目的語として bhavōdadhim (cty) = saṃsāra を補うべきである。

54. 第 1 半詩節を Jacobi は “Why should a wise man, for bad reasons, bring affliction upon himself?” と訳す。cty によれば pariyāvase は paryāvāsayet = āvāsaṃ kuryāt ということになる。PSM (s. v. pariyāvāsa) は Skt paryā+vāsay 「住居を作らせる」を与えている。pariyāvāsay は MW に存在しないが、これらのことから意味としては「住まわせる」以外にない。そして kahaṃ ではなく、Charpentier の読み kahiṃ (= S, Sv) をとる。

nīrae は nī-rajas (nir-rajas) = “free from sin, defilement” の nom. sg. である。

[付記] 本稿作成にあたり、塚本啓祥教授よりご教示をいただいた。記して感謝の意を表す。